

無限に拡大する「民族性」

——ヒトラーとピブーン、2人の独裁者の言説をめぐって

渡 辺 将 尚

1

第2次大戦前から戦中にかけてドイツを独裁体制下においたアドルフ・ヒトラー (Adolf Hitler, 1889~1945, 首相在任¹1933~1945) は、その初期から、優生思想に基づくユダヤ人等の排除とならんで、東部地域へと領土を拡大する大国化の野望を抱いていた。

1939年9月1日、すでにソ連との間に独ソ不可侵条約を結んでいたドイツは、ポーランドへと侵攻を開始する。第2次世界大戦の始まりである。この時点でのヒトラーの目標は「少なくとも1914年の状態を回復すること」²だった。「1914年の状態を回復する」とは、ヴェルサイユ条約によって奪われた西プロイセンやアルザス・ロレーヌなどを再び取り戻すということである。ドイツ軍は破竹の勢いで進軍し、早くも同年末にはポーランドをソ連と分割するに至る。その結果、ドイツは、奪還した西プロイセンを南北2つの「ガウ（「大管区」）」として帝国に併合し、さらにそれ以东のポーランドは「総督府」として厳密にはドイツ領ではないが、実質的にドイツの管理下に置く。つまり、ポーランド侵攻によってドイツは、ヴェルサイユ条約で奪われた「失地」を回復するどころか、それ以上の領土を獲得したことになる。

1940年6月22日、パリを含むフランスの5分の3を占領し、残りを中立地帯とすることで「西部戦線」に決着をつけたヒトラーは、いよいよ「東方への転換」³を打ち出し、東部へ向けてさらなる領土拡大を目論む。この東方政策は、1942年8月から翌年2月にかけてのスターリングラードの戦いにおける敗北により、まったく実現することはなかったが、計画自体は、ヴォルガ川までをドイツの勢力圏内とする実に壮大なものであった⁴。新たに占領したソ連地域は、西プロイセンから排除され「総督府」に追いやられたポーランド人やユダヤ人をさらに移住させたり、ドイツ人を入植させるなど、土地ごとに個別の目的を設定し利用する計画だった。利用目的の設定の際には、「ゲルマン化」しやすい土地であるか、あるいはそうではない「ユダヤ的・アジア的・

1 1934年8月のフォン・ヒンデンブルク大統領の死後は、大統領を兼ね「総統」と称した。

2 永岑三千輝『ドイツ第三帝国のソ連占領政策と民衆1941-1942』同文館, 1994年, 29頁。

3 同91頁。

4 「1940年11月5日に陸軍指導部がヒトラーに対ソ作戦計画を開陳したとき、ヒトラーは『ロシア軍はひとたび打撃が与えられれば、40年のフランスよりもっと大規模な崩壊に遭遇するだろう』とし、ヴォルガまで軍を進めて終戦にしたのち、4つの緩衝国（ウクライナ、白ロシア、リトアニア、ラトヴィア）をソ連領土に樹立する構想を示した。」(同92頁。()は原文のまま。)

ボルシェヴィズム的」(驚くべきことに、この3つはヒトラーにとっては同義語である)であるかが大きな役割を果たしており、あまりにも後者の色が強すぎる場合、利用しないという選択肢もあった。たとえば、全バルト諸国はドイツ領とする⁵、レニングラードは打倒後しかるべき時期にフィンランドに与える⁶、ウクライナはユダヤ人をシベリアに追放した後にドイツと同盟した独立国家とする、共産主義という害悪をまき散らしている大本であるモスクワおよび周辺の住民は餓死させる⁷、などである。

こうした大国化への野心の発端を、ヒトラーが少年時代から抱いていた反ユダヤ主義や大ドイツ主義、あるいは実科学校退学や「ウィーン美術アカデミー」入学試験の2度にわたる不合格など、彼の実人生に結びつけるのは非常に容易である。しかしそれだけでは、戦時下における上記のような東方政策を説明することはできない。なぜなら、それらは前述のように開戦当初の目標である「1914年の状態」、さらには「大ドイツ」の範疇をもはるかに超えているからである。たしかに、1927年に出版された『わが闘争』第2巻には、東方植民地を思わせる記述がある。しかしそこでは「獲得した新領土」あるいは「辺境植民地」⁸と言われているだけで、具体的地名はない。つまり、東方政策は、ヒトラーの念頭に当初からありつつも、第2次大戦を戦う中で具体化されていったものと言うことができる。

ただし、この「具体化」は作戦・戦術の明確化あるいは発展、成熟を意味しない。本稿で注目したいのは、むしろ、当初の思考があいまいであるからこそ、後に適用される段階で、その時々状況に応じていかようにも変形され得る、あるいは場合によっては残酷化し得るという点である。

以下では、同時期に独裁者として大国化をめざしたタイの首相ピブーンのケースを対置することで、どのような条件下において上記のような論理転換が生じるのかについて考察したい⁹。

2

周知のように、ヒトラーは、大衆にとって聞き心地のよい巧みな演説術によってナショナリズムを鼓舞し、人心を掌握していくが、『わが闘争』に述べられているのは、逆に、大衆をも含めた当時のドイツに対する徹底した批判であった。まず議会は、解散をくり返しては政権が変わり、何ら責任感も決断力もない。また、一般大衆も、新聞に書いてあることをそのまま信じ込み、思

5 同127頁。

6 同128頁。

7 同117頁。

8 Adolf Hitler: Mein Kampf, München (Franz Eher Nachfolger G.m.b.H.) 1927, Bd. 2, S.38.

9 この目的を達するためには、同時期にファシズムの風が吹き荒れたヨーロッパ内の国々は、比較対象として不可能とは言わないまでも、不十分である。国の成り立ちや、それ以前の政治的背景が異なり、なおかつ互いに影響を与え合う同盟関係にない国で同一の事象が生じていることを確認することこそが重要である。また、比較対象は、自国の舵取りが自らでき、さらに隣接する他国との力の差が歴然としている(ないしはそう認識している)国でなければならない。なぜなら、植民地支配を受けつつ、あるいは内政上の課題に振り回されつつ大国化を夢見ることはおよそ不可能なことだからである。以上のような意味で、東南アジア唯一の独立国であるタイは、格好の比較対象であると言える。

考を停止している（ヒトラーは、これを病気 (Erkrankungen)¹⁰と呼ぶ）。しかも、そのような「単細胞の群れ」¹¹は国民の「最大多数グループ」¹²であり、彼らの投票行動によって国家のあらゆることが決まっていく。しかし、『わが闘争』におけるヒトラーは、これら病気の「単細胞の群れ」を啓蒙することを諦めている。代わりに彼が目指すのは、まだ頭のやわらかい青少年のうちに、意志と決断力を涵養する教育を行うことだった。とはいえ、彼の言う「意志と決断力」の教育とは、毎日2時間体育の時間を作り、そこで体操やあらゆるスポーツをさせるなど、それほど大層なものではない。また、彼の設定する到達目標は、現体制および大衆への痛烈な批判に比して、驚くほど低い、単純なものであった。

「当然、ある民族が隅々にいたるまで心身ともに健康である (gesund) 時にはじめて、そこに所属しているという喜びが、一人ひとりの中で、我々が国民的誇りと呼ぶ、あの崇高な感情まで高まることができる。しかし、このもっとも崇高な誇りは、まさに自民族の偉大さを知っている (kennen: 英 know) 者だけが感じるすることができるものなのだ。」¹³

この引用は、要約してしまえば、最低条件として自民族の偉大さを知り心身ともに健康であれば、後のことは自ずから成ると読める。しかし、この「健康」ということが、ヒトラーにとっては大きな意味を持つ。そのことを、ヒトラーが1927年12月10日ハンブルクで農民を前に行った演説で確認しておこう。

「健康な民族はその数を増やしていく。その構成要素としての人間は、つぎの世代を生み出すことによって自己を保存するという汲みつくし得ない衝動を持っているからだ。これは、地上に生きとし生けるものすべてがもっている衝動なのだ。」¹⁴

「存在は、人口と土地との正しい関係に基づいており、また、その栄養源は自らの土地にあるという認識を、ある民族がもつ限り、その民族は土地を拡大し、(その拡大した土地に) 住まうことになる。土地の拡大とはまさに人間がもって生まれた権利であり……」¹⁵

後者の引用の冒頭で言われている、民族の「人口」と「土地」が「正しい関係に」あるとは、

10 Adolf Hitler: Mein Kampf. München (Franz Eher Nachfolger G.m.b.H.) 1925. Bd. I. S.245.

11 ibid. Bd. I. S.255.

12 ibid.

13 ibid. Bd. 2. S.63. なお、日本語の「知る」に対応するドイツ語には wissen と kennen の2つがあるが、間接の知識として知ることを表す wissen に対して、kennen は直接の体験・経験等を通じて知ることを指す。自民族の偉大さは、学ぶのではなく、体験されるものと捉えられていることが分かる。

14 Hitler. Reden, Schriften, Anordnungen: Februar 1925 bis Januar 1933. München (K. G. Saur) 1992. Bd.II. (Vom Weimarer Parteitag bis zur Reichstagswahl.) Hrsg. und kommentiert von Bärbel Dusik. S.574f.

15 ibid. S.575. () 内は、引用者が説明のために付け加えたもの。特に断りのない限り、以下の注釈でも同じ。

人口に見合う広さの土地を手にする、ということである。一方、前者の引用では、「健康な民族」は自然とその人口を増やしていく、とある。したがって、この2つの引用で示されているのは、人口が増えれば、それに見合う領土を求めて周辺国に侵攻していくことは当然の権利だという論理である。もちろん「健康」が条件であるから、ヒトラーが憎悪する現在の大人たち、つまり病気に加った「単細胞の群れ」にはこの権利はない。新しく獲得した領土には、若く優秀な者を植民させる計画だった。このことについては、後にもう一度振り返るが、いずれにせよ、前章で示した第2次世界大戦での東方への侵攻は、こうした考えを実行に移したものであった。

3

この到達目標の単純さと領土拡大の野心は、一見すると相容れないものであり、これらが容易に結びついてしまうところに、ヒトラー特有の詭弁を見いだすことができるようにも思われる。なぜなら、領土を拡大するためには、通常、戦闘行為が必要であるが、低い理想のもとに育成された人間たちで軍を組織し、なおかつ平民に戦時下の生活を耐えさせることは非常に困難なことだと想像されるからである。しかし、他の独裁者の中にも同じ論理を見いだす時、こうした論理の飛躍は、一定の条件を満たせば他の人物にも容易に起こり得るものであることが理解されるであろう。以下ではいよいよピブーン・ソクラーム（Pleak Phibun Songkhram, 1897～1964、首相在任1938～1944, 1948～1957）は、もともと平民の出であったが、12歳で小学校を卒業すると、陸軍士官学校への進学を希望する。ここから、彼の軍人としての経歴が始まる。1921年に入学した「陸軍参謀学校」では見事成績第一位で卒業し、官費によるフランス留学の機会を手に入れる。当時のタイは、チャクリー王朝による絶対王制が存続しており、ピブーンに限らず、ヨーロッパに留学したタイ人留学生たちは、母国における「民主主義」と「強国」の必要性を切に感じ取っていた。

1927年2月、ピブーンを含め、革命の志を同じくする7名がカルチュ・ラタンの一角に集まり、「人民党」の結成大会が開かれた。この時に決定された、全国民の平等、自由、教育の普及といった「革命六原則」は、実際に彼らがクーデタを成功させた1932年6月24日、人民党宣言の中で発表されることになる。この後、第1回人民代表議会により初代首相が任命されるが、新政府は王制を廃止せず、立憲君主制を敷く¹⁶。

ピブーンは、初めは年長者に首相の座をゆずるが、クーデタから6年半ほどが経過した1938年12月16日、陸海軍の支持を得てついに首相に任命される。首相の他、さらに国防・内務大臣をも兼務した彼は、さっそく反対派の大弾圧に乗り出す。結果、51名を起訴し、18名に死刑、25名に終身刑を下した。

このように独裁体制を固める中で、第2次大戦への反応は早かった。ドイツがポーランドに

16 この王制は現在も続いており、クーデタ時の王がラーマ7世、現在の国王はラーマ9世である。

侵攻した4日後の1939年9月5日、タイはまず中立を宣言する。しかし、1940年6月、フランスがドイツに敗れると、状況は一変する。1893年の仏泰戦争で失った領土を回復するどころか、それ以上のものを獲得できる機会が生じたのである。1940年9月5日、ピブーンは、仏領インドシナのタイ族だけでなく、ラオス・カンボジアなどの住民の入国税および入国手続きを免除すると発表し、さらに同9月11日、フランス・ヴィシー政権に対し、メコン川を国境とし、西岸をすべてタイに返還するよう要求する。これらの要求の根底にあるのは、ラオス人もカンボジア人（クメール人）もタイと同一種族であるという主張であるが、実際、広い意味でのタイ族に入れられるのはラオ族のみで、クメール人は全く別系統の民族である¹⁷。

結局、この要求はフランス側に受け入れられず、タイ・仏印戦争が始まるが、日本の調停によって、タイは、ラオス・カンボジアまでを含むかつての最大領土を回復することはできなかったとはいえ、一部の失地回復には成功する。

*

ピブーンが、国民を1つにまとめ上げ、タイ（首相就任当初はまだ「シャム」）を強国化するために用いた方法は、実にユニークなものだった。彼は1939年6月24日に、「ラッタニヨム第1号」なるものを発布する。内容は、国名を「シャム」から「タイ」に変更するというものであるが、「ラッタニヨム第2号」以下では、タイ国民が遵守すべき生活・行動の指針を定めており、1942年1月までに計12号が出された。玉田芳史氏によれば、全12の「ラッタニヨム」の内容は以下の通りである。

「第2号（39年7月3日）：「チャートは最も重要なものである」がゆえに、その利益を損ねる行動を厳に慎まなければならない。第3号（39年8月2日）：国家が不可分であるにもかかわらず、その住民をエスニシティなどに応じて分け隔てするのは適切ではなく、皆「タイ人」と呼ぶべきである。第4号（39年9月8日）：国歌、国旗、国王賛歌に敬意を払わねばならない。第5号（39年11月1日）：国産品を愛用して国内産業を支援しなければならない。第6号（39年12月10日）：国歌の歌詞の変更。第7号（40年3月23日）：自己建設や家族建設に努めてチャート建設に貢献しなければならない。第8号（40年4月26日）：国王賛歌の歌詞の変更。第9号（40年6月24日）：タイ語に誇りを持ち、その習得に努めねばならない。第10号（41年1月15日）：市域内では洋服か伝統的な衣装を着用し、きちんとした身なりをしなければならない。第11号

17 タイ族はもと中国南東部、長江以南に居住していた民族で、漢民族からの圧迫により、西進・南進をくり返して現在の位置に移動してきたと考えられている。一方、それより以前に現在のタイ領内に居住していたのがクメール族を含むモン・クメール系の民族であり、1240年頃、スコータイのクメール太守を駆逐してその地に都を建設したのが、タイ民族による最初の王朝（スコータイ王朝）の始まりであるとされている。（柿崎一郎：『物語 タイの歴史』中公新書、2007年。タイ民族の出自に関しては15～16頁。クメール帝国については29～31頁。スコータイ王朝の始まりについては36頁を参照。）

(41年9月8日)：時間を有意義に活用し、規則正しい生活を送って健康を保たねばならない。
第12号(42年1月28日)：文化的な人間は子ども、老人、身体不自由者を助けなければならない。]¹⁸

先に、「ラッタニヨム」は「生活・行動の指針」だと言ったが、特に第10号以降を見ると、実に初歩的で基本的なものであることが分かる。これは、西はビルマ、東はラオス・カンボジアまで英仏に制圧されている状況下で、それら西洋列強に対して、タイ人が文化的にふるまえることを示し、独立を守り抜くためのものであった。周知のように、「文化的レベルの低さ」あるいは「野蛮さ」は、「統治能力のなさ」と結びつけられ、しばしば植民地化の格好の口実となった。

しかし、「ラッタニヨム」の目的はそれだけではない。ここでは、「ラッタニヨム」のもう一つの側面について、引用中に下線を引いた第3号と第9号を見ていきたい。

いわゆる西洋的な意味での近代化がタイで本格的に着手されたのは、1880年代からである。時の王ラーマ5世は、これまで地方の平民たちを支配していた領主たちに代わり、バンコクから官吏を派遣して、中央集権化を図り、さらに徴兵制の導入や鉄道の建設を行っていく。当時まだ北部チェンマイを首都とした独立国であったラーンナータイ王国への影響力を急激に強め始めたのも、この時期である¹⁹。このラーンナータイ王国は、立憲革命の1932年にシャムの一部となり、600年以上にもおよぶその歴史を閉じるが、革命後、政府はさらなる統合政策を進めていくことになる。こうした文脈の中で「ラッタニヨム」第3号と第9号を読めば、その意図がはっきりと浮かび上がってくる。つまり、タイ国内に居住している以上、それは民族に関わらず「タイ人」なのであり、しかも「タイ語」(これはバンコク周辺で話されている標準タイ語を指す)²⁰を話さなければならないというわけである。

4

我々が掲げていた課題は、到達目標の単純さと領土拡大の野心という、一見すると相容れない2つの思考がいとも簡単に結びついてしまうということが、ヒトラー特有の詭弁や論理の飛躍の結果ではなく、一定の条件を満たせば容易に起こり得るものであることを示すことであった。

18 玉田芳史：「タイのナショナリズムと国民形成」〔東南アジア研究〕34巻1号、1996年、138頁。]一部省略、および表現を改めた箇所があるが、()の年月日は原文のまま。また、下線は引用者が付したもの。引用文内に使用されている「チャート」という言葉は、英語のnationに対応するタイ語で、「民族、国民、国家の3つの意味を渾然一体と備えて」(同130頁)いる。

19 18世紀末、それまで約2世紀の間ビルマの属国であったラーンナータイは、ビルマ勢力を一掃するためにシャムと同盟を結ぶことを選択する。(Iijima Akiko: Preliminary Notes on "the Cultural Region of Tham Script Manuscripts," *Senri Ethnological Studies* (National Museum of Ethnology) 74, 2009, p.16.) それ以降、ラーンナータイはシャムの勢力下に入るが、1894年、シャムがビルマを支配するイギリスと国境策定を行った際、シャン州から西をイギリス、ラーンナータイから東をシャムと定める。(Murakami Tadayoshi: *Buddhism on the Border: Siam Buddhism and Transborder Migration in Northern Thailand*, *Southeast Asian Studies* (Center for Southeast Asian Studies Kyoto University) 1 (3), 2012, p.370) そこからシャムはラーンナータイへの影響力をさらに強めていくことになる。

20 「ラッタニヨム第9号には……中央平原で話されているタイ語を、王国内のいかなる地域でも用いられる国語としようとする意図があった。」(Kobkua Suwannathat-Pian: *Thailand's Durable Premier*, Phibun through three decades 1932-1957, New York (Oxford university press) 1995, p.122.

では、上に述べた「ラッタニヨム」に代表されるピブーンの政策が、なぜ大国化主義へとつながっていくのだろうか。実際のところ、「ラッタニヨム」やそれに付随する法令等で定めた条件をすべて満たす「タイ人」——たとえば、外国のものを使わず、きれいな「標準タイ語」を話し、たえず国王に敬意を払い、身なりに気を遣い、健康である「タイ人」——は、未だ実在するはずのない、理想の存在である。しかし、未だ存在しないということが、逆説的に、無限の増殖への可能性を開く。なぜなら、誰も「タイ人」ではないということは、誰でも「タイ人」になれるということの意味するからである。先に、「クメール人はタイ人とは別系統である」と言ったが、このクメール人さえ「タイ人」になることができるのである。現に、「ラッタニヨム第3号」では、民族は関係ないと謳われている。

ここで、ヒトラー、ピブーン、両者の共通点は明らかである。ヒトラーも、彼が定義するところの理想の「ドイツ人」は存在しないという認識から出発する。そして、これから教育を施すことで、「ドイツ人」を作っていこうとする。その際、彼が設定した目標は、ピブーン同様、非常に単純なものだった。

この「単純性」こそが、論理の転換を促す重要な要素である。「単純性」ゆえに、タイの場合、「タイ人」の定義はどこまでも拡大することができた。ドイツの場合も、ヒトラーが構想したような教育を受ければ、どのような者でも、自民族の偉大さを知り、意志と決断力を持ち、心身ともに健康である「一個の完全なドイツ人 (ein ganzer Deutscher)」²¹となることができるのである。

しかしここで一つの疑問が湧いてくる——青少年を教育し、彼らが大人になり国を背負えるようになるまで待つ必要があるだろうか。新たに獲得した地にも「意志と決断力を持ち、心身ともに健康」な人間は確実にいるはずであり、そのような人間たちを仲間に取り入れることを考えた方が、手っ取り早いのではないか。その際、もし彼らの中に「自民族こそが偉大だ」という信条がくすぶっていたとしても、それは大きな問題とはならないであろう。なぜなら、徹底した「ゲルマン化」によって、「ドイツ民族の偉大さ」に置き換えればよいからである。つまり、ここで考察したいのは、上述の「単純性」を媒介とした論理転換——「誰も一個の完全なドイツ人でない」から「誰でも一個の完全なドイツ人になれる」——が他民族にも適用されるのかどうか、またそれが可能なのだとすれば、いかなる条件によるのか、ということである。

前述のように、ヒトラーの東方政策——占領地の利用法——は、第2次大戦を戦う中で具体化されていったものであった。したがって、この問いに答えるためには、東方政策が決断されていくその場に立ち会い、そこで何が語られていたのかを検証する必要がある。以下では、戦時中のヒトラーの言行録である『ヒトラーのテーブルトーク 1941-1944』²²を参照しながら、この点につ

21 Adolf Hitler: Mein Kampf. Bd. 2. S.62.

22 "Hitler's Table Talk 1941-1944." Trans. Norman Cameron and R.H. Stevens, London (Weidenfeld and Nicolson), 3rd ed. 2000. 本稿で用いたのは Enigma Books Inc. (New York) から出版された同書のアメリカ合衆国流通版。本書は、1941年5月からヒトラーの秘書を務めたマルティン・ボルマンの指揮の下編纂された、「ボルマン覚書 (Bormann-Vermerke)」と呼ばれる「公式記録」(ibid. p.vii. "Preface to third edition by H.R. Trevor-Roper") である。なお、この

いて考えていくことにしよう。

まず1941年10月13日の夕食時、ヒトラーは以下のような言葉を発したとある。

「デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギー、スウェーデン、フィンランド。彼らに今日の前に開けている将来の展望を示してやろう。彼らの大多数は、我々の前に計り知れない土地が広がっていることに気づいていない。しかし、彼らは、自分の国のために何かしなければならないと前向きに考えている人間たちなのだ！有り余る人口を掃き出せるその受け皿がロシアに見つかることや、そうすれば必要なものはすべて手に入るといったことが分かれば、彼らが諸手を挙げて我々の陣営に加わってくれるというのも、不可能なことではないように思う。」²³

冒頭に挙げられている6カ国のうち、この時点でドイツは、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギーをすでに支配下に置いている。スウェーデンは中立国、フィンランドは6月22日ソ連に対し宣戦布告を行ったばかりである。つまり、ここに挙げられているのは、無条件に仲間であると認められるゲルマン系諸国、および「敵の敵」という否定的な論理とはいえ、自らの陣営に引き入れられる可能性を持つ国である。これらの国には、「自分たちの国のために何かしなければならないと前向きに考えている人間たち」がいる。しかし、このことはヒトラーにとって否定的な要素ではない。彼らもまた、「何かしなければならない」という「意志」を持っており、ヒトラーによって自分たちの可能性に目が開かれさえすれば、すぐに行動に移そうとする「決断力」をも兼ね備えているからである。しかも彼らは目を開いてくれたことに感謝し、自ら喜んでドイツ帝国の一員となる。つまり、人々が持つ「自国のため」という感情も、容易に「ドイツのため」に変容させることができるのである。

完全にゲルマン系ではないが、「スラヴ人と比べてよりゲルマン的である」²⁴民族もいる。クロアチア人である。クロアチアでは、1941年4月、枢軸国軍の侵攻でユーゴスラヴィアが降伏した後、ナチス・ドイツの傀儡国家が樹立されている。ヒトラーは、クロアチア人の「誓いを破らない」意志の強さを高く評価する。以下の引用は、1941年10月29日、夕食時の会話である。

「クロアチア人たちが帝国の一員となれば、総統直属の忠実な外人部隊として、湿地帯の警備に当たらせよう。……クロアチア人は誇り高い人々である。……彼らは完全に信頼できる。クヴァテルニクを黙ってその場に立たせてみればよい。そうすれば、揺らぐことのない友情、永久に破られない誓いといった、私がこれまでずっと接してきたクロアチア人の典型を目にすることがで

英語版の初版出版（1953年）からはるかに遅れて、1980年によくドイツ語版が出されたが、1942年3月12日から9月1日までの記録が欠落している。したがって、本稿では、欠落時期に該当するしないを問わず、一貫して英語版を用いるものとする。

²³ *ibid.*, p.53.

²⁴ *ibid.*, p.8.

きることだろう。」²⁵

あくまで「外人部隊」の地位に留まるとはいえ、その意志力の強さゆえ、クロアチア人たちもドイツ帝国に参加することができるのである。

ここでヒトラーの思考の特徴が浮かび上がってくる。ドイツ軍が占領あるいは支配下に置いた（あるいはこれから置く可能性のある）地域の人々を、「ゲルマン的」ないしは彼の目指す「意志と決断力」を持ち合わせた民族と定義することで、その地域の占領行為や支配行為が正当化されるのである。その傾向は、戦局が進展し、東部へと深く侵入していくにつれて、ますます強くなっていく。つぎの引用は、1942年1月22日、昼食時の会話である。

「我々の200年にわたる統治が終わるまでには、国籍の問題解決に成功することも不可能ではない。
……

（19世紀、オーストリア帝国で普通選挙が導入されたことにより、ドイツ人の優越は崩壊し、選挙制度上は劣等民族と同等となりはしたが、それでも）チェコ人はハンガリー人、ルーマニア人、ポーランド人よりましだった。チェコ人の中には、勤勉でまじめで、分をわきまえた小ブルジョアジーが成長していたのだ。今日、彼らは以前と同じように、憤慨と感服が入り交じった気持ちで再び我々に頭を下げるようになるだろう。……

他を統治することが日常になれば、人はうまく命令することができるようになるものだ。チェコ人たちが、同じようにハプスブルク帝国の周辺部にいる他民族よりも自分たちの方が優れていることが分かれば、もしかしたら彼らの劣等感も克服できるかもしれない。」²⁶

ハンガリーとルーマニアは、1941年4月、ドイツ軍がユーゴスラヴィア、ギリシアなどに相次いで侵攻する中で、枢軸国側に加わった国々である。なお、第1次大戦後成立したチェコ・スロバキアのうち、チェコはドイツに併合（1939年3月）、スロバキアは独立しドイツの保護国となっている。この引用での中心的話題は、そのチェコ人である。ヒトラーの見るところ、現在のチェコ人は他の東欧諸国よりは勝るものの、未だ劣等感を克服できていない。しかし、その劣等感さえ払拭できれば、東欧諸国の最上位の民族として受け入れられる可能性があると読むことができる。もちろん「我々に頭を下げる」とあるように、あくまでドイツ人による支配の下ではある。しかし、曲がりなりにも支配民族の仲間に加わることができるのである。

こうしてヒトラーの思考は、東欧の最果てブルガリアにまで及ぶことになる。つぎの引用は1942年4月10日のものであるが、時間帯は示されていない。

25 ibid, p.95.「クヴァテルニク」はクロアチアの軍人の名。

26 ibid, pp.228-229.

「ドイツでエンジニアリングを学んだり、学位を取ったブルガリア人はたくさんいる。外国人が我が国の大学で学位を取ることを助成するというのは、よい政策であろう。こうした助成を受けて（我が国で）青春時代の一時期を過ごした人々は、（我々の）生涯の友人となってくれることだろう。」²⁷

ブルガリアも、前出のハンガリー、ルーマニア同様、1941年、ドイツと軍事同盟を締結し、枢軸国側に入った国である。ブルガリア人だけでなく、青年期にドイツで勉学に励んだ外国人たちは、ドイツにとって生涯の友となるのだという。ここでは、「意志」「決断力」「健康」といった個人の資質は、もはやまったく問題とされていない。ただ一時期、ドイツで学んだ経験があればよいのである。

それから約一月後の1942年5月12日夕食時の会話では、我々は『わが闘争』からは想像もつかない驚愕の記述に出くわすことになる。

「ある特定の民族のゲルマン化の問題は、抽象的な理念や理論で判断してはいけない。一人ひとり個別に審査しなければならない。審査のポイントはただ1つ、どの民族の人間でも、ドイツ民族とうまくやれ、ドイツ民族の価値を高めることができるか、あるいはその反対に（ユダヤの血がドイツの血と混ざった時のように）悪い結果しかもたらさないのかを、確認することである。」²⁸

「ゲルマン化」可能かどうかは、一人ひとり検証が必要であり、民族単位で一律に決めつけることはできないのだという。しかし『わが闘争』第二巻においてヒトラーは、つぎのように述べていた。

「大ドイツ主義者の間でも、当時（＝ヒトラーの少年時代）、政府の手助けによって、オーストリアに住むスラヴ民族を完全にゲルマン化できると主張する人がいた。そういう人々は、ゲルマン化が土地だけに可能であって、人間に関しては決してできないことをまったく分かっていなかったのだ。」²⁹

スラヴ民族やユダヤ民族を「ゲルマン化」することはできない。唯一可能なのは、彼らを追放した後にドイツ人を植民し、ドイツ人たちがその土地で農業をすることによって、土地を「ゲルマン化」することだけである。すでに見たように、ヒトラーは、新しく獲得した領土には、若く優秀な者を植民させる計画だった。彼らが「単細胞の群れ」から引き離され、新領土に定住し、

27 ibid, p.421.

28 ibid, p.473.

29 Adolf Hitler: Mein Kampf, Bd. 2, S.18f.

子孫を残すようになれば、自ずから優秀な者だけが住む理想的な土地が出来上がるということであった。

「こうしてだんだんと、人種的にもっとも純粹で有能な者たちだけが住む辺境植民地を形作っていくことができるのである。」³⁰

5

『ヒトラーのテーブルトーク』において、ヒトラーは、ドイツ周辺のゲルマン諸国から言及し始め、次第にその視線を東へと移していく。たしかに、それはドイツが支配下に置いた順序とは一致しない。たとえば、前章で挙げられた国々のうち、もっとも早くドイツに併合されたのはチェコであり（1939年3月）、デンマーク、ノルウェー、オランダ、ベルギーの占領と、ハンガリー、ルーマニア、ブルガリアの枢軸国入りは同時期である（1940年4月～5月）。しかし、ゲルマン諸国から始まり、東部地域の住民たちを西から順に自分たちの仲間であると認識していく過程は、ソ連領内へと深く進軍していく戦局の動きと見事に一致している。つまり、前線での勝利を重ねていくごとに、逆に、ヒトラーの理想とするところは、「一個の完全なドイツ人」から、「ゲルマン民族」、「意志と決断力」を備えた人間、「規則の習慣」を身につけた人間、そして最終的には「青年期の一時期」をドイツで過ごした人間、というように、徐々にレベルを下げていくのである。もちろん、レベルが下がるとは、適用範囲が広がることに等しい。ここにおいて我々は、「誰もヒトラーが理想とするドイツ人でない」が、「誰でも——しかも、他民族であっても——ヒトラーが理想とするドイツ人になれる」に反転するロジックに立ち会っていることになる。

とはいえ、これはヒトラーの思想の突然変異ではない。実は先に見た『わが闘争』の中にその萌芽は確実に存在していた。以下は、すでに引用した文であるが、新たにドイツ語を付した部分に注目されたい。

「健康な民族（Ein Volk, das gesund ist）はその数を増やしていく。その構成要素としての人間は、つぎの世代を生み出すことによって自己を保存するという汲みつくし得ない衝動を持っているからだ。これは、地上に生きとし生けるものすべてがもっている衝動なのだ。」

「存在は、人口と土地との正しい関係に基づいており、また、その栄養源は自らの土地にあるという認識を、ある民族（ein Volk）がもつ限り、その民族（ein Volk）は土地を拡大し、（その拡大した土地に）住まうことになろう。土地の拡大とはまさに人間がもって生まれた権利であり……」

30 ibid. Bd.2. S.38.

ヒトラーの優生思想を念頭に置いてこの部分を読めば、たしかにここで言われている「民族」とはドイツ民族を指すとも解釈できるが、文法的には不定冠詞 ein (=英 a) が付いていることから分かる通り、ここに述べられているのは、どの民族にも当てはまる、どの民族にも可能な一般論である³¹。つまり、「健康で」「自民族の偉大さ」（前述のように、これは容易に「ドイツ民族の偉大さ」に変えることができる）を知っている民族なら、どの民族でも領土拡大に参画することができるのである³²。冒頭に言った、後に適用される段階でいかようにも変形され得るあいまいさがここにある。

*

ヒトラーおよびピブーンの大国化主義を下支えする論理の共通点はすでに明らかである。しかし明確な相違点も存在する。残虐性である。ピブーンも、たしかに、自らの地位を確立するため、政敵に対しては厳しい態度を取った。だが、他民族に対しては、ラオス人、カンボジア人の入国手続きを免除するなど、これを寛容と呼べるかどうかは議論の余地があるとしても、ヒトラーが子孫を残すべきでないと考えた人々——ユダヤ人、共産主義者、精神病患者など——へ向けたような残虐性は持ち合わせてはいなかった。この点についても、両者の言説を詳細に分析した慎重な議論がいずれ必要である。しかし、現時点で可能性のみを指摘すれば、以下のようなだろう。極端な優生思想を含んだ攻撃的な大国化主義に対して、周囲が西洋列強に支配されていく中で、自国をその危機から守ろうとする防衛的な大国化主義もまた同様に存在しうる、ということである。

31 この引用の前の部分で、ヒトラーは、小さな政党が乱立し、政権を取るためには連立するしかなく、さらに各政党も公約を守らない現行のヴァイマル体制に対して痛烈な批判を浴びせているが、その部分には „Deutsche“ (「ドイツ人」) „Deutschland“ (「ドイツ」) „dieser Staat“ (「この国」) „die jetzige Zeit“ (「今の時代」) 等の言葉が頻繁に登場する。

32 ただし、『わが闘争』では何度もユダヤ人に対して憎悪の言葉が投げつけられており、この著作に優生思想が存在しないことを主張するものではない。

Das sich unendlich vergrößernde Volkstum —Diskurse der zwei Diktatoren, Hitler und Phibun

Masanao WATANABE

Adolf Hitler (1889-1945) schrieb schon in „Mein Kampf“ (Bd. 1. 1925, Bd. 2. 1927), dass das deutsche Herrschaftsgebiet für die immer größer werdende Einwohnerzahl zu klein sei und Deutschland sein Gebiet erweitern solle, um ein neues Land mit tüchtigen jungen Leuten zu besiedeln. Dazu, behauptet Hitler, brauche man eine Erneuerung der Erziehung.

Aber da zwingt sich die Frage auf: Was er durch die neue Erziehung beabsichtigt, ist im Vergleich mit seinem großen militärischen Ehrgeiz etwas ganz Einfaches: Ein starker Wille und Entscheidungskraft. Wie lässt sich dieses Ungleichgewicht erklären?

Um darüber nachzudenken, ist der Fall des ehemaligen thailändischen Ministerpräsidenten Pleak Phibun Songkhram (1897-1964) sehr hilfreich, weil dieser auch zur selben Zeit diktatorisch regierte und auf die Erweiterung des Herrschaftsgebiets zielte. Wozu er dabei die Leute zwang, ist auch auf eine einfache Formel zu bringen: Inlandsprodukte zu konsumieren, das in Bangkok und in den benachbarten Ortschaften gesprochene „schöne Thailändisch“ zu sprechen, sowie sich immer ordentlich zu kleiden usw.

Was man im Fall Phibun betrachten kann, ist das Folgende: Sein festgesetztes Ziel ist zwar ganz einfach, aber es gab damals noch niemand, der das Ziel perfekt erfüllen konnte. Dieses „noch niemand“ sorgt aber auch für neue Möglichkeiten der Interpretation: Dass noch niemand ordentlicher Thai ist, bedeutet, dass jeder ein ordentlicher Thai sein kann: Auch benachbarte Völker wie die Lao und die Khmer haben diese Möglichkeit.

Dasselbe kann man auch für Hitler sagen: Für ihn gab es noch keine ordentlichen Deutschen. Alle damaligen Deutschen, so Hitler, hätten keinen starken Willen und keine Entscheidungskraft. Darum wollte er junge Leute auf eine neue Weise erziehen.

Jetzt sind die Gemeinsamkeiten der Argumentation und der Zielsetzung der beiden Diktatoren klar geworden: „Noch niemand ist A“, aber „jeder kann A sein“.